『國民新報』1939年10月22日

[主張]　個人の眞面目　―神と君の惠みのもとに―

をした一とへることつたへはない。つてこれをするはない。すべてのはこゝにざす。かゝるつたは、はの一であり、の一であり、の一であるとふりに、や、や、がののためにあるかのにはせる。をわがとひ、とふ。

は一であつてでもでもない。はやの一であることをして、の一である。つてはへるであつて、へられるではない。にあてがはれたは、とをてへることが、てののである。

をれてなく、をれてはない。るに々がするであるかのくへたり、つたりするのは、ののが、よりれるかをするのさに、まだしてないことをしか、てるものでない。ひかへればなるであり、かさにならない。

一ツ。なくしてありわがくるはがにして、のにあらずとふること、かでれいことはない。にをけふたのもであり、に々のをへふのもにまします。、、、てがするものはよりのけとすることこそ、の一でなければならない。

をしまつらぬものが、にしてのにましますことをしまつらうぞ。

と、をみ、ひ、めさせふ。そのにひ、そのにひらんこそ、わが一のとずることは、そのたるをはず、べてののたるべきであり、ちのであり、ににしてらざるのである。

さればとてをすることではない。ののをなす千はに一一のによつてなつたものだ。わがのも、一ののに、々一一ののによつてされるのだ。このにこそ、の、、びがあるのである[[1]](#footnote-1)。

1. 『同胞に寄す』では「眞面目、眞價値、眞の喜び」に修正されている。 [↑](#footnote-ref-1)